

小学校英語教材・教科書の分析と理論的枠組の検証

渡慶次 正則

An inquiry of conceptual frameworks and analysis of  
English materials and course books of elementary school

Masanori TOKESHI

名桜大学

環太平洋地域文化研究 No. 2 抜刷

2021年 3 月

資料

## 小学校英語教材・教科書の分析と理論的枠組の検証

渡慶次 正則\*

### An inquiry of conceptual frameworks and analysis of English materials and course books of elementary school

Masanori TOKESHI\*

#### 1. はじめに

21世紀前後を境に多くのアジア諸国・地域では小学校英語教育が政府主導で積極的に推進されてきた。韓国では1997年から小学校3年生以上を対象に、中国は2001年から小学校3年生以上を対象に、台湾では、2001年から小学校5年生以上を対象に公立小学校で英語教育が実施された。日本では、2011年(平成23年)から小学校英語教育を公立小学校5年生と6年生を対象に正式に開始し、他の東アジア諸国・地域に比べて公立小学校における開始時期が10年以上も遅れた。

早期英語教育は、政府の外国語教育政策、教授法、教員養成と研修、教師の英語能力、教材や関連資料、試験や評価などの要素が英語教育の成果に大きく影響する(Garton, Copland, & Burns, 2011)。国際的規模で政府やグローバル企業経営者らが先導する中で、早期英語教育は加熱しており、英語学習の低年齢化が進む傾向にある。早期英語教育に経験のない語学教師による指導や英語力と外国語教授法の知識と技能を持たない小学校教員による英語指導は、長い間議論となってきた(Arnold & Rixon, 2008)。早期英語教育の効果を産み出すために、教材や教科書の検証もこれまでさまざまな議論がなされている。

いわゆるKachru (1992) のInner Circleに属する英語を第1言語とする国々における早期英語教材・教科書に関する研究成果や理論は、日本などの英語を外国語とする言語環境(EFL)に比べて関連研究は先行しており、その議論や主張は多岐に渡る。例えば、Tomlinson (2017) は英語教材出版社が作成する教材と研究者が求めている教材に乖離があると指摘する。Ellis (2017) は、第2言語習得研究の成果に基づいて、教材や教科書の開

発や検証がなされるべきであると指摘する。また、児童の心理的・認知的発達を考慮した理論的原理に基づいて英語教科書や教材を開発、検証すべきであると指摘する(Tomlinson, 2015; 2017; Ghosn, 2013; 2019)。児童期の学習者は、語彙、文型、音韻などの言語事項を個別に学ぶのではなく、題材(topic)を中心に総合的に学ぶべきであるという考えがある(Pinter, 2006; Ghosn, 2013; 2019)。

日本の英語教育においては、学校教育法より小学校検定教科書の使用が法的に義務付けられており<sup>1</sup>、特に、日本では教科書を中心に授業を行う傾向が強く(LoCastro, 1996)、教科書の編集原理や目標、内容が英語教育の成果に大きく影響する。

日本では、2020年より教科として「外国語」が正式にスタートし、小学校で初めて、5年生と6年生の検定英語教科書<sup>2</sup>が全国47都道府県の教育行政区で選定され、利用が始まった。小学校検定教科書が導入された現在、英語教育推進に性急になることなく、教材や教科書を理論や先行研究に基づき適切に分析し、その過程で生じる知見が教師に伝えられなければならない。早期英語教育の教科書や教材の根底にある理論や原理を改めて探り、その理解に基づいて質の高い小学校英語教育を模索することは意義があると考えられる。

アジア地区では、理論や実証的研究が不足しているために、試行錯誤で小学校英語教科書が導入されてきた(Butler, 2015)。例えば、韓国では1997年に16種類の小学校英語教科書が採用されたが、2001年には学年ごとに統一英語教科書が採用され、再び十年後には多様な英語教科書を採用する方針に変更した。

日本の小学校英語教育の中心的な役割を担う教材や教科書の研究はミクロ的な視点の研究が多く、堅固な第2

\* 名桜大学 国際学群 〒905-8585 沖縄県名護市為又1220-1 Faculty of International Studies, Meio University, 1220-1 Bimata, Nago, Okinawa 905-8585 Japan

言語習得理論や発達心理、認知などの理論や明確な教材分析の観点に基づいた研究はほとんどないと考える。

例えば、小学校英語教科書に関する研究としては、語彙（中條・西垣・宮崎，2009）や文法項目（藤原・仁科・松岡，2010；本多・志村，2017）などの言語事項の研究、コミュニケーション活動（志村ほか，2015）、異文化理解（出口マクドナルド，2019）などのミクロ的視点から検証した研究が多い。

本稿では、論じられるコンテキストにやや相違があるので、「早期英語教育」と「小学校英語教育」の2種類の用語が使用されるが、「早期英語教育」は国際的なコンテキストを論じる時に、「小学校英語教育」は日本や近隣アジア諸国・地域のコンテキストを論じる時に主に用いているが、原則として同義語である。また、本稿では小学校学齢期にあたる子ども達（younger children）を総称して児童と称する。早期英語教育の教材は、劇、歌、チャンツ、物語、DVDやCDなどが挙げられるが本稿では児童用の教科書（course book）を念頭に焦点化する。

早期英語教育の研究はまだ十分ではないが、言語事項の習得に限定せず、認知能力、メタ認知能力、心理的発達、異文化理解と異文化間意識を育成するマクロ的な視点を目標とするべきであると示唆するRead（2015）の主張は、これまでの実践や研究を巧みに収め込んでいる（Tomlinson & Masuhara, 2018）。

本稿では英語教材・教科書研究の第一人者であるTomlinsonの研究を中心に、第2言語習得研究や認知、心理などの統合的な面から、教科書比較分析の先行研究などを通して、小学校英語教科書を適切に評価する基準や理論的枠組みを明確にすることを目的とする。

本稿は、日本の小学校英語教育共通教材等の状況を述べた後に、児童の英語学習に適切な教材・教科書の開発、評価、使用の原理と基準や理論を第2言語習得理論や発達心理学、英語教材分析先行研究などから論じていく。

## 2. 文部科学省による小学校英語共通教材や指導書等の支援

小学校英語教員養成や現場教員研修が小学校英語教育政策の推進に追いつかない現状で、小学校英語教科書の補助教材や指導書は重要な役割を果たしてきた（Arnold & Rixon, 2008）。

国内では、小学校英語教育の推進にあたり、文部科学省より共通教材として教科書が発行された。2011年の「外国語活動」の導入に際しては、『英語ノート5年』（文部科学省，2008a，平成20年）と『英語ノート6年』（文部科学省，2008b，平成20年）が発行され、全国の拠点校に配布された。さらに後継版として小学校5年生対象の『Hi, friends! 1』（文科省，2012a，平成24年）と6年

生対象の『Hi, friends! 2』（文科省，2012b，平成24年）が発行され、全国に配布された。2020年からスタートした「外国語活動」の共通教科書として小学校3年生対象の『Let's Try! 1』（文科省，2019a，平成31年）と4年生対象の『Let's Try! 2』（文科省，2019b，平成31年）を、「外国語」の共通教科書として5年生対象の『We Can! 1』（文科省，2019c，平成31年）と6年生対象の『We Can! 2』（文科省，2019d，平成31年）を発行・配布した。

2011年の小学校英語教育開始の前に文部科学省は英語指導者研修や中学校英語2種免許講習（渡慶次，2020）に加えて、指導の手引きやガイドブックなどを発行しながら着実に小学校での英語教育の導入準備を行ってきた。2002年（平成14年）から開始した「総合的な学習」では、多くの小学校が教育課程に英語学習の導入を予定したので、『小学校英語活動実践の手引き』（文科省，2001，平成13年）を発行して全国の小学校に配布し、英語学習の目標や授業の形態、年間活動計画、活動内容や教材等の指針を示した。さらに、2011年より正式に「外国語活動」が小学校5年生と6年生を対象に各年間35時間の授業が行われた。「外国語活動」の導入に伴い、『小学校外国語活動研修ガイドブック』（2009，平成21年）を発行・配布して指導法やカリキュラム等の理論と言語知識や技能の実践、『英語ノート（5年，6年）』の活用法等を示した。さらに小学校英語教育の強化政策として、2020年（令和2年）より小学校3年生と4年生は「外国語活動」として各年間35時間、小学校5年生と6年生は教科としての「外国語」を各年間70時間学習する。「外国語活動」および「外国語」の導入に際して、『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文部科学省，2017，平成29年）を発行・配布して小学校学習指導要領の解説、指導案作成例、言語知識や技能の実践編、教員研修等の指針を示した。

## 3. 早期英語習得研究に基づく教材

早期英語教育の初期は、第1言語習得研究と第2言語習得研究の成果に従い、音声言語を中心としたリスニング力とスピーキング力を育成するのが通常である（Lightbown & Spada, 2013）。韓国や日本の小学校英語教育では、小学校英語教育の初期はリスニング力とスピーキング力の育成を目的とする。しかし、中国では小学校英語教育初期から文字言語が導入されており、グローバルな出版社でもリーディングやライティングなどの文字言語の指導については普遍的な原則がある訳ではない（Arnold & Rixon, 2008）。

児童は、理解できるインプット（comprehensible input）がcaretaker speech<sup>3</sup>（保護者の子供への話し方）によって、無意識に、習得順序、感情的負荷が低い時に、非言

語的な身振り手振り、視覚物、声の調子などの助けを借りて理解される (Krashen, 1982)。さらに教材については、“here and now” という原則があり、目に見えている物 (here) や、現在起きていること (now) を中心に教材を作成するのが一般である (Krashen, 1982)。しかし、物語や自分の経験を語る時に現在形で表現するのは不自然であり、過去形は語りの談話形式 (narrative discourse) に必要であるという考え方がある (Ghosn, 2013)。実際に、文科省作成の共通教材である『We Can! 2』(小学校6年生)の教科書では、夏休みの経験を発表する題材で不規則動詞の過去形が導入されている。Ghosn (2013) は、the British National Corpus を用いて、sayとsaidの頻度を調べた結果、sayは62,218例、saidは195,554例を検索結果で算出し、saidの方が日常生活ではより頻繁に使用されると指摘している。“here and now” の原則は、児童の生活や経験を考慮しながら慎重に解釈されなければならない。

第2言語を習得する際には、シラバスや指導法等の環境に関わらず、どの児童も同じ順序で言語形式を習得することを示した研究がある (Krashen, 1985)。特に現在進行形や三人称単数s、複数形s、規則動詞edなどの形態素についての習得順序があると報告されている。また、これらの形態素は習得が難しく、児童の実際の発話では省略しても意味が伝わるために、省略する傾向がある (Ghosn, 2013)。

言語習得の初期は、1語や2語の発話から始まり、数語を組みあわせて電報の様 (telegraphic) に伝えたり (Lightbown & Spada, 2013)、数語の意味の固まり (chunk) で発話したり、また定型表現 (formulaic) を頻繁に使用することが報告されている (Ellis, 2003)。

これらの言語習得研究から児童用の教科書では、3人称単数sや一般動詞edなどの形態素の導入を避けたり、定型表現を頻繁に学習させる配慮がなされている。

さらに、児童が泳ぎ方や自転車の乗り方を無意識に覚えているように、手続き記憶 (procedural memory)<sup>4</sup>を用いて文型・文法を習得するという報告がある (Ullman, 2001)。つまり、この原理からすると、大人のように文法の知識を活用するのではなく、児童は場面の中で、目標文型を反復して聞いたり、話したりすることにより文法を学習する (Ghosn, 2013)。

#### 4. 児童の心理・感情と教材

児童向けの英語教材の条件は、題材に関連しており、学習者にとって興味深く、意味があり、場面にあった自然な言語を用いる、言語の形式より意味に焦点をあてている、言語技能が統合され、何度も使用される、インプットを繰り返し与え、アウトプットの機会を与

え、さらに文化的に適切であるなどの条件を必要とする (Ghosn, 2019)。大人の学習者は、外国語学習から利益を得るために (道具的動機づけ)、また外国語が使用される国の文化や人々に興味がある (統合的動機づけ) などの理由で外国語学習の動機づけを持つ (Gardner, 1985)。一方、英語を使用する機会が大人に比べて少なく、実際の言語使用場面を想像することが難しい児童にとって、教材や活動が「面白く、楽しい」という内的動機 (Deci & Ryan, 1985) は重要である (Tomlinson & Masuhara, 2018)。児童は、大人向けの教科書のように伝統的な文法・反復などの内容ではなく、絵カード、ポスター、実物、歌、チャンツなどを用いて、遊びや活発な探求を行う内容にすべきである (Ghosn, 2013)。

さらに、意味のある教材 (meaningful materials) は、言語習得につながると報告する研究がある。教材の奇抜さ (novelty)、感情に訴える、個人的な情報が記憶に残るとされる。対比して、丸暗記の知識を用いることは、語彙や文法のクイズで良い成績を収めたり、テストに合格することには効果があるが、実際の生活の中で活用されることはない (Ghosn, 2013)。

また、Bland (2015) によると、大人とは異なり、児童はあいまいさに寛容で、リズムを楽しんだり、詩歌を通して偶然に文法を学習したりすることも報告されている。児童の発達や興味に合わせた外国語教育の研究はまだ把握できていない面が多い。

#### 5. 児童の認知発達と教材

児童の発達段階に応じた英語教材を作成することは重要である。特にPiaget (1978) の認知モデルは、言語習得の年齢に応じた学習教材について示唆を与える。Piagetによると、感覚運動期 (1か月から2歳) では、反射、本能、言語を獲得し、知覚に結びついた感情が表れる。前操作期 (6歳から7歳) では、思考への活動が内在化し、初歩的社会感情、最初の道徳的感情が産まれる。具体的操作期 (7歳から8歳) では、クラスや経験の基本的操作を獲得し、自立的道徳感情が出現する。形式的操作期 (11歳から12歳頃) では、抽象的な考え、仮説かつ演繹的思考が可能である。つまり、Piagetのモデルによると、文法規則などの抽象的な学習は、思春期である11歳から12歳以前では適さないことになる。同様に、Ellis (2017) によると児童は大人の学習者の様に、言語を分析、理解し、記憶することには熟練しておらず、大量のインプット、インタラクティブなインプットを中心としたタスク、創造的活動などに適していると述べている (p.216)。つまり、大人の学習者の様に文法規則を明示的に学習し、応用してアウトプットする言語学習は児童には適さない。

さらに、Larsen-Freeman & Long (1991) は、認知発達が言語習得の成功に強く影響しているとしている。つまり、年齢の低い子供は、すべての人間の子供が生得的に持っている言語習得装置 (LAD)<sup>5</sup> を用い、大人は問題解決の能力を用い抽象的な思考が可能で、文法学習に適していると説明している。

## 6. 児童の意味のやりとりや発話と教材

児童向けのシラバスや教材は、伝統的なAudio-Lingual Methodからコミュニケーションを目的とするCommunicative Language Teaching を中心とする傾向に移行している (Richards & Rogers, 2014)。しかし、主要なグローバルな出版社の児童向け教材には、題材を中心 (topic-based) としたシラバスの中に巧みに文型構造に基づき学習が進行する構成を潜ませていることが多い (Arnold & Rixon, 2008)。Tomlinson & Masuhara (2018) は、早期英語教育でコミュニケーションや発話を頻繁に行う傾向を懸念し、まず十分にリスニングで英語のインプットを受けてから、発話を行うべきであるとしている (p.264)。日本では、small talkを小学生に行わせる傾向があるが、準備ができていなければ、発話が強制的にならないように配慮すべきである。

## 7. 早期英語教科書の比較研究

早期英語教育の教科書を比較研究した事例を下記に述べる。

Arnold & Rixon (2008) は、28か国・地域の76人の早期英語教育担当教員を調査した結果、教材の重要な要素として、「面白く、楽しい」(81.5%)、「リスニングとスピーキングを中心」(81.5%) で共に同じ割合で筆頭に選択されており、次に「クラスでのやり取りを促進すること」(75%) という結果を報告している。上記で述べたように、児童にとっては「面白く、楽しい」という感情面が大切であり、さらに言語学習初期は音声を中心としてリスニングやスピーキング、またクラスでのコミュニケーションを中心とした教材内容を教師が重視していることがわかる。さらに教師のコメントとして、教師用ガイドが非常に役に立ち、問題点として文法事項を反復する練習問題、教材のレベルや難しさが急に変化すること、示唆として児童の認知や成長度にあった適切な教材が必要であることなどが報告されている。筆者の経験としては英語母語話者の童謡として利用されるMother Gooseの歌について英語レベルは適当だが、歌詞の内容は小学校高学年の児童にとっては、幼稚な内容に思われるかもしれない。

Littlejohn (2011) の教材分析枠組み (本稿の資料を

参照) は、研究者や大学院生によく引用される有用なチェックリストである。Littlejohn (2011) によると教材を最終的に採用するかどうかは、次のプロセスで行うことを提案している。第1段階は、言語の使用を目標とする状況の分析 (文化的コンテキスト、教育団体、プログラム、教師、学習者) と教材分析 (明確な特徴、利用者に求められること、利用により生じる結果、設計や出版) の二つの分析を同時に行う。第2段階は、二つの分析を相互比較して整合性を判断する。最終段階に、教材を採用するか、不採用にするか、教材を応用して活用するか、補助教材が必応かなどの判断を行う (p.202)。Littlejohnのチェックリストの項目の様に、教材や教科書は様々な要素が関わって選択される。

現場の実情として、Arnold & Rixon (2008, p.40) によると、小学校英語教師の資質が十分に満たされない状況では、良い教材とは「児童が利用しやすい」(child-friendly) というよりむしろ、「教師が利用しやすい」(teacher-friendly) ことが教材や教科書の選択の重要な要素であったと指摘する。2020年から導入された国内の小学校英語検定教科書も現場の英語教員によって選択されたことから、言語事項や題材、異文化理解などの主要な要素よりも、担当英語教員の英語能力や英語指導法の技術、現場の多忙さなどを主要な判断材料として複数の検定教科書から選択されたことは十分に推測できる。Tomlinson & Masuhara (2018) は自身の経験で、韓国の小学校教科書を題材や物語を通して語彙や文型を意識せずに習得していく設計にしたが、保護者の要望により伝統的な明示的な文法学習の教材に変更になった経験を述べている。

## 8. 英語教材・教科書の評価基準の理論的枠組み

これまでの英語教材についての議論は、Tomlinson (2015; 2017) が提案する教材開発と評価の根拠となる5つの基準 (criteria for materials development and evaluation) で包含される部分が多い。また、マクロ的な観点から英語教材についてのRead (2015) の示唆は、より広い見地から包括的に教材の在り方を説明している。この2名の研究者の主張を引用しながら、これまでの議論のまとめに代えたい。

最初に以下に、Tomlinsonの早期英語教育教材の評価基準に関する提案を述べる。

第1点に、「使用している言語に触れること」(exposure to the language in use) が重要である。教材の言語にインプットとアウトプットについて次の具体的な要件を示している。つまり教材が理解できるインプット (comprehensible input) を与え (Krashen, 1985)、言語の多様性や量が豊富で (rich)、学習者の生活に関連

して意味があり (meaningful), 実際に用いられる生の言語に触れ (authentic), 様々な方法で一定期間に何度も使用されることにより再利用される (recycled) ことである。同様に (Ellis, 2002) は, 文字言語や音声言語は言語学習の頻度が影響すると主張する。しかし, 豊富なインプットを与えるために Audio-Lingual Method (Richards & Rogers, 2014) の mechanical drill (場面や目的を考慮しない反復) が多用される懸念があり, 意味のある場面で反復される必要がある。また, 実際の教科書では, Unit 内で反復されたとしても異なる Unit 間で同じ語彙や文型を反復することを考慮していない問題がある場合が多い (Arnold & Rixon, 2008; Ghosn, 2013)。

第2点に「感情の積極的な関わり<sup>6</sup>」(affective engagement) を考慮することが必要である。つまり, 教材は笑いや興奮, 楽しさ, 同情などの感情で反応すること, 外国語学習経験が肯定的な姿勢を与え, 自身や自己尊重を高めるべきである。無味乾燥で感情的な変化を起こさない教材は習得の妨げになる (Tomlinson, 2017)。

第3点に「認知の積極的な関わり」(cognitive engagement) に配慮する事である。動機づけは肯定的な態度の心理的な面ではなく, 批判的な思考や創造的な思考などを刺激することを教材は配慮すべきである。簡単で意味のない練習問題や単純な音読をくり返すことは言語習得につながらない (Tomlinson, 2017)。

第4点に, 「意味も留意しながら (後に), 言語の形式に注意する」(pay attention to form whilst or after focusing on meaning) 事を考慮しなければならない。いわゆる focus on form (Long, 1991) に関することである。場面や言語の目的を考慮したコミュニケーション中心の活動では時々, 誤った言語形式をそのまま使用し続ける場合がある。特に教師が教材使用について正しい言語形式にフィードバックを与えて, 児童に正しい言語形式に気がつかせることが必要である。

最後に, 「コミュニケーションのために言語使用の多くの機会を与える」(plentiful opportunities to use the language for communication) ことが必要となる。上記の第2点と同様に空所埋めや教師により制御された活動 (controlled activity) などの機械的な言語活動ではなく, 意見や視点を述べたり, 特定の目的を達成する意味のあるコミュニケーションに取り組む教材に配慮するべきである (Tomlinson, 2017)。

Read (2015) は, 早期英語教育を効果的に行うには次の要素が重要であると述べている。子供の英語学習は, 1) 言語へ豊富に触れる事, 2) 他のコンテクストに転用できる言語パターンの反復, 定型表現, 言語の意味の固まり (chunks), 3) 創造的な成果につながる, 参加している状況での自然なやり取りと意味のある反復の機会とする (XI)。Read (2015) は, 限定された言語的成

果だけではなく, 言語学習の動機づけや成功につながる劇やストーリーテリング, 絵本, 詩などを用いた総合的なアプローチを用いて心理, 認知, メタ認知, 感情を考慮した長所を指摘している。

ReadとTomlinsonの早期英語教材に対する考えは重なる部分が多く, 統合的に教材の在り方を捉えている。

## 9. 日本の小学校教科書について先行研究から再考

これまで英語を母語とするコンテクストで行われた英語教科書・教材の理論研究や実証的調査を論じてきた。最後に, 日本に視点を転じて, 本稿で検証してきた理論的枠組みや基準について再考したい。Tomlinson (2015; 2017) の教材評価の原理を軸に以下に, 論じる。

最初に, 英語を母語とする環境では, 物語や題材 (topic) を中心とした英語教材・教科書を利用する効果を主張する研究者が多い (例: Pinter, 2006; Ghosn, 2013; 2019)。つまり, 物語や題材は実生活で使用されている英語を豊富に与え, 繰り返し触れることで, 意味のあるやり取りのなかで, 語彙や文型も自然に習得される (Tomlinson (2015; 2017) の第1の原理)。さらに, 物語中心の教材は楽しさや驚き, 感動を与える (Tomlinson (2015; 2017) の第2の原理)。加えて, 物語や題材を通して批判的思考や課題解決などの認知能力も育成することができる (Tomlinson (2015; 2017) の第3の原理)。「We Can! 1」と「We Can! 2」を概観すると Story Time という活動で各 Unit に 1 ページの短い対話がある。対話の内容は, ある場面設定で登場人物が目標文型を繰り返す構成であり, 物語のプロットが展開する中でさまざま登場人物が現れる設定ではない。日本で, 物語や題材を用いる英語学習の効果について, 否定的な論調があるかどうかは定かでないが, 中学校検定英語教科書がコミュニケーション能力の育成を目的とするにも関わらず, 明示的な文法・文型学習をする設計 (渡慶次, 2015) であるように, 出版社の作成した教科書と研究者の求める教科書には乖離があるのではないだろうか。推測される課題は, 物語の臨場感を伝えたり, 感情表現をしたり, 題材を通して社会問題等を議論するには, 教師の高い英語力を要する。また, 物語や題材は, 目標の言語事項が明確である伝統的授業形態とは異なり, テストによらない評価などが保護者等に支持を得られない可能性がある。

児童の発達段階に応じて, 英語学習の興味や楽しさを持たせる教材の重要性が指摘されてきた。大人の価値観とは異なり, 児童は独特の世界観や興味, 関心, 驚きを持っている。大人は経済的な利益や異文化理解などの価値観を持って外国語学習に取り組む傾向があるが, 大人

が価値観を見出さない単純な繰り返しの活動（チャンツや歌や動作など）を児童は楽しむ一面もあり、「意味がある教材」ではなくても夢中に取り組むことができる場合がある。児童の興味、学習の特性、動機づけ、認知などについて外国語学習研究は未知な面が多い。

意味のあるやり取りをしながら、正しい言語形式に気づかせる（Tomlinson (2015; 2017) の第4の原理）ためには、日本では、1クラスに最大で40人を抱える英語学習環境では、教師が一人一人の児童にどのように正しいフィードバックを与えられるだろうか。児童数が多ければ必然的に、児童全体への明示的な言語形式のフィードバックをする可能性がある。さらに、教師も正しい言語形式に気づかせるために教室英語を駆使できる英語能力も必要となる。

さらに、コミュニケーション中心の英語教育の優位により、授業では児童に英語でのやりとりをさせる場面が多い（Tomlinson (2015; 2017) の第5の原理）。The Communicative Language Teachingは元々、1970年代にヨーロッパで増加した大人の外国人労働者の外国語コミュニケーション能力を育成するために用いられた教授法であり、児童のために開発された教授法ではない。大人の外国語コミュニケーション能力の構成概念に従うのではなく、児童の成長過程や生活環境に応じた外国語コミュニケーションのモデルに基づいた教材作成が必要である。

日本は小学校英語教育が本格的に始まって20年足らずである。2020年度から小学校検定英語教科書が使用され始めたが、教科書のシラバスに従い、内容を忠実に教えることに徹するのではなく、英語学習教材・教科書の根底にある理論的枠組みや分析の基準を理解することは、今後の日本語英語教育の推進に寄与すると考える。

## 注

1. 学校教育法（昭和22年法律第26号）第34条により検定教科書の使用が法的に義務付けられており、「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない。」（傍線は文部科学省ホームページより原文ママ）と文部科学省は法的根拠を示している。
2. 2020年から採用された検定教科書は7社あり、開隆堂のJunior Sunshine、啓林館のBlue Sky、三省堂のCrown Jr.、学校図書のJunior Total English、光村図書のHere We Go!、教育出版のOne World Smiles、東京書籍のNEW HORIZON Elementary English Courseである。
3. caretaker speech（保護者ことば）は、保護者が幼児に話しかける発話のことで、ゆっくりと簡単な単語や文型を用い、反復し、大きな声ではっきりと話す特徴がある。同様な話し方に、teacher talk, foreigner talkがある。
4. 手続き記憶（procedural memory）は簡単に言葉で説明できないことが多く、意識しなくとも使うことができる。「体が覚えている」状態である。手続き学習の例として、自転車の乗り方の練習、タイピングの練習、楽器の練習、水泳の練習がある。手続き記憶は永続性がある場合もある。対比して、意識的に記憶した文法規則は、陳述記憶（declarative memory）である。
5. LAD (Language Acquisition Device) は、Noam Chomskyによって提唱され、人間が生得的に備わっている母語（の文法）を習得する装置。
6. Engagementは、所属意識や参加、動機づけ、自己効力感、学校接続といった領域を統合する「メタ構成体（meta-construct）」や学習活動への意欲的な取り組みや関与のあり方を示すものとしてエンゲージメントという用語がそのまま学術誌で用いられているが、本論では「積極的な関わり」と訳する。

## 謝辞

本研究は科学研究費補助金（課題番号19K00768）の助成を受けたものである。

## 引用文献

- Arnold, W., & Rixon, S. (2008). Materials for teaching English to young learners. In B. Tomlinson (Ed.), *English language learning materials: critical review* (pp.33-59). London: Continuum.
- Bland, J. (2015). Grammar templates for the future with poetry for children. In J. Bland (Ed.), *Teaching English to young learners: Critical issues in language teaching with 3-12 years old* (pp.147-166). London: Bloomsbury.
- Butler, Y. Goto (2015). English language education among young learners in East Asia: a review of current research (2004-2014). *Language Teaching*, 48 (3), 303-342.
- Deci, E. L. & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- 出口マクドナルド友香理 (2019). 「小学校外国語科「We Can!」の教材分析—異文化理解の視点から—」『中部

- 地区英語教育学会紀要』48, 89-96.
- Ellis, N. (2002). Frequency effects in language acquisition: a review with implications for theories of implicit and explicit language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 24 (2), 143-188.
- Ellis, N. (2003). Constructions, chunking, and connectionism: the emergence of second language structure. In D. J. Doughty & M. H. Long (Eds.), *The handbook of second language acquisition* (pp.63-103). Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. (2017). Language teaching materials as work plans: An SLA perspective. In B. Tomlinson (Ed.), *SLA research and materials development for language learning* (pp.203-218). New York: Routledge.
- 藤原康弘・仁科恭徳・松岡結 (2010). 「小学校外国語活動における品詞・文法へのコーパス言語学的アプローチ」『JACET 中部支部紀要』(8), 15-31.
- Gardner, R.C. (1985). *Social psychology and second language learning: the role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold.
- Garton, S., Copland, F., & Burns, A. (2011). Investigation global practices in teaching English to young Learners. London: British Council.
- Ghosn, I.-K. (2013). Language learning for young learners. In B. Tomlinson (Ed.), *Applied Linguistics and materials development* (pp.61-74). London: Bloomsbury.
- Ghosn, I.-K. (2019). Materials for early language learning. In S. Garton & F. Copland (Eds.), *The Routledge Handbook of teaching English to young learners* (pp.374-388). New York: Routledge.
- 本田尚子・志村昭賜 (2017). 「小学校外国語活動教材と中学校英語教科書における文法項目の比較」『北海道教育大学紀要』68 (1), 119-135.
- Kachru, B.B. (1992). World Englishes: approaches, issues and resources. *Language Teaching*, 25 (1), 1-14.
- Krashen, S. (1982). *Principle and practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon.
- Krashen, S. (1985). *The input hypothesis: issues and implications*. London: Longman.
- Lightbown, P.S., & Spada, N. (2013). *How languages are learned (4th edition)*. Oxford: Oxford University Press.
- Littlejohn, A. (2011). The analysis of language teaching materials: inside the Trojan Horse. In B. Tomlinson (Ed.), *Materials development in language teaching* (pp.179-211). Cambridge: Cambridge University Press.
- LoCastro, B. (1996). English language education in Japan. In H. Coleman (Ed.), *Society and the Language Classroom*. Great Britain, Cambridge University Press.
- Larsen-Freeman, D., & Long, M. (1991). *An introduction to second language acquisition*. New York: Longman.
- Long, M. (1991). Focus on Form: A Design Feature in Language Teaching Methodology. In K.debot, D. Coste, R. Ginsberg, & C. Kramersch (Eds.), *Foreign Language Research in Cross-cultural Perspectives*. Amsterdam John Benjamins.
- 文部科学省 (2001). 『小学校英語活動実践の手引き』.
- 文部科学省 (2008a). 『英語ノート第5学年試作版』.
- 文部科学省 (2008b). 『英語ノート第6学年試作版』.
- 文部科学省 (2009). 『小学校外国語活動研修ガイドブック』.
- 文部科学省 (2012a). 『Hi friends! 1』東京:東京書籍.
- 文部科学省 (2012b). 『Hi friends! 2』東京:東京書籍.
- 文部科学省 (2017). 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』.
- 文部科学省 (2019a). 『Let's try! 1』東京:東京書籍.
- 文部科学省 (2019b). 『Let's try! 2』東京:東京書籍.
- 文部科学省 (2019c). 『We Can! 1』東京:東京書籍.
- 文部科学省 (2019d). 『We Can! 2』東京:東京書籍.
- 中條清美・西垣知佳子・宮崎海理 (2009). 「小学校5・6年生「英語ノート」の語彙一覧」『日本大学生産工学部研究科報告B』, pp.99-115.
- Piaget, J. (1978). *The development of thought: equilibration of cognitive structures*. Oxford: Blackwell.
- Pinter, A. (2006). *Teaching young language learners*. Oxford: Oxford University Press.
- Read, C. (2015). Foreword. In J. Bland (Ed.), *Teaching English to young learners: critical issues in language teaching with 3-12 years olds* (pp. xi-xiii). London: Bloomsbury.
- Richards, J.C., & Rogers, T. (2014). *Approaches and Methods in Language Teaching (3rd edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 志村昭暢・山下純一・白田悦之・横山吉樹 (2015). 「小学校外国語活動教材と中学校英語教科書のコミュニケーション活動の比較」『小学校英語教育学会誌』15巻 (1), 112-124.
- 渡慶次正則 (2015). 「2012年採択の中学校英語検定教科書における文法・文型の配列と提示形式の検証」



- 『Southern Review』No.29, 71-86.
- 渡慶次正則 (2020). 「小学校英語教育における教員研修と教員養成, 指導力・英語力ー小学校英語コア・カリキュラムを中心にー」『名桜大学紀要』No.25, 75-84.
- Tomlinson, B. (2015). Developing principled materials for young learners. In J. Bland (Ed.), *Teaching English to young learners: Critical issues in language teaching with 3-12 years old* (pp.279-293). London: Bloomsbury.
- Tomlinson, B. (2017). Achieving a match between SLA theory and materials. In B. Tomlinson (Ed.), *SLA research and materials development for language learning* (pp.3-22). New York: Routledge.
- Tomlinson, B., & Masuhara. H. (2018). *Materials development for language learning*. New Jersey: Wiley Blackwell.
- Ullman, M. (2001). The neurocognitive perspectives on language: The declarative/procedural model. *Neuroscience*, 2, 717-726.

- (4) Subject matter and focus of subject matter (学習の主要な部分)
- (5) Types of teaching/learning activities (教授/学習活動の種類)
- (6) Participation : who does what with whom (学習者の個人, ペアワークやグループワークなど学習形態)
- (7) Classroom roles of teacher and learners (教室における教師と学習者の関係や役割)
- (8) Learner role in learning (学習における学習者の役割)
- (9) Role of the materials as a whole (全体としての教材の役割)

## 資料

### Language materials analysis checklist

(Littlejohn, 2011)

(語学教材分析チェックリスト)

1. Publication (出版物について)
  - (1) Place of learner's materials in the set (学習用の教材内容や活用法, 教師用資料との違いなど)
  - (2) Published form the learner's materials (教材のレイアウトや装丁, 材質など)
  - (3) Subdivision of the learner's materials (各Unitの配置やUnit間の関係など)
  - (4) Subdivision of sections into sub-sections (Unit内のsectionの細かい構成と内容など)
  - (5) Continuity (題材や物語が教科書内全体のなかで系統性があるか。例えば, 登場人物の経験が物語のように系統的に進展する)
  - (6) Route (学習の進み方や発展学習の進み方)
  - (7) Access (Unitの題名のリストや言語事項のリストなど)
2. Design (設計)
  - (1) Aims and objectives (教材の目標や目的)
  - (2) Principles of selection (選択の原則: タスクの種類, 年齢に適切か, 異文化や学習者の興味を考慮しているか)
  - (3) Principles of sequencing (系統性の原則: 言語事項や文化理解などが系統的に配列されているか)